
内なる力、目醒める刻

蒼月 紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

内なる力、目醒める刻

【Nコード】

N4642V

【作者名】

蒼月 紫苑

【あらすじ】

遙かなる神話の刻…神に近い二つの種族が支配権をかけて争ったのだ。次第に大きな戦いになり、遂には平和だった世界にまで影響し、たった数ヶ月で、世界は一度滅んだ…だが、数多の種族が支配権をかけて人を中心に団結・共闘して平和を勝ち取ったのだった。

しかし、数千年が経ち、歴史は悲劇を繰り返そうとしていた。

世界にあるのは、平和かほろびか…審判の賽は投げられたさい…。

プロローグ（前書き）

初めまして、あおつき蒼月 しおん紫苑と言います。

最後までお付き合い頂けると幸いです（ ）

プロローグ

『くつ、このままでは…この世界が滅ぶ。お前の望みを叶えさせはしない!』

仲間が倒れ、己^{おのれ}も瀕死の傷を負っていた。右手に持っている剣には、

傷から流れ出た血が、刀身を紅く染め上げ妖しい煌めきを放っている。既に息は

荒く、剣を支えに立っているのがやつとなのだ。

『その辺にしておけ、人間よ。お前は”神”たる我々を相手によく戦った…しかし、

この穢れた世界は滅びなければならない。それが、”神々の黄昏^{ラゲナロク}”の逃れられない審判なのだ。』

3

神と名乗った者は、静かに言い放つ。既に世界は、その大半が焼け野原となつて

おり、昔の命溢れていた面影は見る事が出来ないほどに荒れ果てて、滅ぼされている。

『冗談じゃない…勝手に神の戦いに巻き込んだ拳句に滅べたと?…ふざけるな…』

さらに続ける。

『ハア、ハア…ッ、身勝手が許されてたまるか…!』

なんとか身体を支え、震える両腕で構える。最後まで足掻こうとする男を
冷やかな目で見下し、片手を男に向かって翳す。その手に、圧倒的な力が
集約していく。

「…愚かな。神の定められた宿命に抗うか…ならば、苦しむ事無いように
葬ってやろう…」

「来い、最後まで抗わせて貰う…」集え！世界を護りし七人の守護天使。神の碑石に我が
名を刻め！我が名を神の烙印とし、立ちほだかりし敵を討て！」

男の唱える呪文に、敵が揺らぎ隙が生まれた。

「…それは…あの方の！なぜ、お前みたいな人間が…」

「…これで終わりだ。」絶対崩壊の序曲《フルブレイク》ソング》
”

呪文が発動した瞬間、男の背中に八枚の翼が現れた。

「…き、貴様は、ルシ…ぐわあああつ！」

滅びゆく断末魔で、言葉がかき消されてしまった。

「…はあ、はあ…これで…」

力を使い果たした男は、その場に崩れた。その身体は次第に

光の粒子となり、空へ溶け込んでゆく。

『すまない…みんな…約束は、守れそうに…』

男の言葉は、最後まで声になる事はなかった…。

この熾烈を極めた戦いは、後に”神戦”と呼ばれて語り継がれる事となる。

時代は流れ、再び、審判は訪れの時を刻み始めた…。

― 未来にあるのは”光の世界”か…

― それとも”滅び”か…

― 運命の賽^{さい}は投げられたのだった…

プロローグ（後書き）

ども（、、、）ノ

いかがだったでしょうか？文章になっていればいいのですが、
なにぶん、久々に執筆したので心配です（、・―・、）

それではまた、続きでお会いできると信じて（、、、）ノ

序 章 〵 神天熾・ルシファアの意志を継ぐ者 〵 (前書き)

さて、お待たせしましたσ (^ | ^ ;)
ようやく、形になりました (' ' ')

序章 神天熾・ルシファアの意志を継ぐ者

― 聖なる森・英雄の碑石 ―

(…なんだ、今の…夢?…に、してはリアル過ぎるよな)

「…よっと。やっぱり、夢だよなあ。まるで、その場に居たみたいだ…忘れよう」

初夏にしては涼しい風が、木の葉を揺らして吹き抜ける…ここは、青年にとって秘密の場所だった。

町の人間なら、余り近づかない聖地なのだ。目の前に建っている遺跡は、神話の遺産とされていて、神聖視され祀られている。この遺跡には、世界を救った英雄の劔（るしファア）が安置されているのだ。

神話として語られる物語が、”真実である”証拠でもある。

なぜ、真実であると言えるのか…それは、安置されている劔は、”朽ちる事が無い”からであつた。

正確には、放置されている…と、言った方が正しいのだろう。それでも、持ち去られない理由は

”誰にも、手に取る事が出来ない”のだ。

これでは、持ち去ろうにも持ち去る事が出来ない。寝呆けた身体を起こすために遺跡の中に入っていく。散歩と言った方がいいだろう。遺跡の中は意外に涼しく、一休みにはいいほどヒンヤリとしている。地下に埋まっている最深部まではさほど時間はかからなかった。

(しかし、この劔…持てる人いるのか?)

最深部にポツンと無造作に飾られている剣に近づきながら、そんな事を考えていた。すると、突然、どこからともなく声が發せられた。

『…刻は満ちた。意志と魂を受け継ぎし者よ…我を手にし、世界を救え』

突然聞こえた正体不明の声に、慌てて辺りを見回すが人の存在は無かった。

(…気のせいか…そうだな。ここ、本来なら立ち入り制限されるし)

そんな事を考えた時、再び声が聞こえた。

『…少年よ、気のせいではない。私は、お前の頭に直接話しかけている』

「誰だよ、話しかけて来るヤツは！」

気味の悪い声に、無意識に怒鳴り散らした。それに応えて、謎の声は冷静に続ける。

『落ち着きなさい。私はここだ』

その声に反応するように、安置されている劔が淡く光だした。

「なっ！」

突然の事に振り返ったままの姿で、固まった。そこには劔の姿は

無く、輝く無数の翼を持った伝説や神話の中の天熾が立ち、見降ろしていた。

「…嘘だろ…これは夢だ…」

『…これは、現実だよ…認めるには時間がかかるだろうが。長かった…私の意志を継いだ者よ』

驚きから戻り切らない青年に、優しく語りかけてくる。

「…」

『君も感じているはずだ…この世界に、異変が起きつつある事を。天変地異や動物たちの凶暴化…世界が叫ぶ悲痛の声が』

語りかけてくる目の前の天熾は、哀しみの光を宿していた。

（俺は、この天熾を知っている…。初めて会ったハズなのに…なぜか、気持ちじゃなく、”何か”が共感する…）

その時、地鳴りが大地を揺らす。

「うわっ！ な、なんだ…これ」

『始まったか…神すら避ける事の出来ない運命…”神々の黄昏”が…。転生した君の名を覚えてくれないか？』

何かを予見し、今更ながらに聞いてくる。真意を問うように天熾の双眸を見返した。

「…シオン」アツシュ」ルーシエ…アンタは？」

つぶやく様に名乗り、目前の天熾に聞き返す。天熾は、優しく名を告げた…。

『私は…神天熾？ルシファア。人としての名を「ラグナ」アツシュ」ルーシエ」…君の前世だ…』

「なっ！…【ラグナ」アツシュ」ルーシエ】…？」

衝撃的な告白に、言葉を失った。驚くのは仕方ない…その名は…古より口伝されている世界を救った英雄の名前だった。しかも、目の前に居る天熾が、その英雄だと言うのだから当たり前だ…更には、シオンがその英雄の転生者だと言うのだから。

「…嘘だろ…俺には、そんな力はない…」

『それは当然だ。転生とは記憶を塗り替える事に等しい。神と同じだ…人と神とを繰り返す…。生き永らえて居るのはごくわずか…。だが、生前の力を手に出来る事は可能なのだ。諭し導く道標を残す事で、ね。さあ、私を手にし、最初の一步を踏み出せ…若き私よ…世界の行き着く先は、今の君にかかっている…』

その言葉を残し、強烈な光の後には天熾の姿はなく、一振りの剣が変わらず安置されていた。

「ちょ、待って…マジかよ…。夢…じゃ無いかな？」

半信半疑で剣に歩み寄り、手を伸ばして？んでみるとしっかりと感触が伝わって来た。

「…掴める…夢じゃ無いんだ…」

突然の事に、全く実感湧かないが取り上げて、夢では無かった事を確かめっていると剣は淡い光を纏い、シオンの手に吸い込まれた。どうやら、必要な時以外は体に収まっていて、必要な時だけ出せるらしい。

（…なんか、実感無いけど…旅するしかないか…異変が起きてるのは事実だしな…）

「まっ、なんとかなるだろ。まずは、旅支度しなきゃな」

そう言つて遺跡を後にした…。シオンの姿が森の中に消えた後に、三つの姿が現れた。

『アレが、選ばれし者？ダサイ…』

『そう言つな。アレが選んだんだ、あの方に違いない。私達は、彼奴に望みを託すしか無いんだ』

『…残された時間は少ない。取り敢えず、あの男を監視しておくしかない…。さて、我らも”人”に身を落として近づくとしよう』

一陣の疾風^{かせ}が吹き抜けると、三人の姿が消えた…。彼女達は何者なのだろうか。多くの謎を残しながらこうして、物語の幕は上がったのだった…。

果たしてこの先、どんな冒険が待っているのだろうか…世界は、一人の青年に託されたのだった…。

序 章 〵 神天熾・ルシファールの意志を継ぐ者 〵 (後書き)

はてさて、今回謎の人たちも現れて、波乱の予感がするσ(^ | ^) ;
)

次の物語も、現在執筆中ですーφ(| |)
早めにUPしたいと思います。

次話で、お会いしましょう(^ ^) / □

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4642v/>

内なる力、目醒める刻

2011年11月17日11時16分発行